

景福宮の復元作業

——現代韓国政府のナショナリズムを見る視点から——

文学部4年 難波 沙由理

目次

はじめに

I 景福宮に関する歴史

1 壬申倭乱

2 乙未事変

3 韓国併合・朝鮮総督府庁舎建設

II 復元作業における伝統文化の復元

1 復元作業とその経緯

2 伝統文化の復元

(1)丹青

(2)四神

(3)日月山水図の屏風

おわりに

はじめに

本稿では「景福宮（キョンボックン）」という王宮に焦点をあて、現代韓国政府のナショナリズム（民族意識）について考えていきたい。景福宮は韓国ソウルにある、朝鮮王朝時代の王宮である。景福宮といえば、現在では観光地として有名である。ソウルを訪れた人の多くが景福宮を訪れる。筆者も昨年ソウルに行った際に初めて訪れた。そして、その色の鮮やかさ、日本にはない建物の形に感動したものだ。しかし、景福宮はただの観光地であるだけではない。韓国の歴史においても重要な場所である。現在、復元作業が進められているのもそのためではないかと考えた。

景福宮は朝鮮王朝を建国した太祖李成桂が、新しい王都を作るために1395年に建設した。その面積は約4.2ヘクタールで東京ドームの約9個分と、とても広大である。景福宮は1592年の秀吉による「壬申倭乱」で焼失するまで正宮とされていた。その後長い間、景福宮は再建される事なく正宮の座からも離れていた。19世紀の半ば、当時の国王高宗の父親である興宣大院君が再

建を決定し、1873年に再建され正宮とされた。1910年に韓国併合条約が調印され、日本による植民地支配が本格化した。そして、1916年から1926年にかけて景福宮の前に朝鮮総督府の庁舎が建設された。そのため、弘礼門など多くの建物が破壊されることとなった。

このような歴史をもつ景福宮に対して、現代の韓国政府はどのような思いをもっているのだろうか。現在進められている復元作業は、韓国政府のナショナリズムとどのような関係にあるのだろうか。このような問題意識から、本稿のテーマで執筆することにした。

本稿は以下の順序で進められる。第1節では景福宮に関する歴史を整理する。次に第2節では復元作業において伝統文化の復元を中心に復元を中心に分析する。このような作業を通して、韓国政府のナショナリズムについて考察していこう。なお、歴史用語等に関しては本稿ではできるだけ韓国での用語を使用する。

I 景福宮に関する歴史

1 壬申倭乱

1592年と1597年の2回にわたり豊臣秀吉は朝鮮半島へ出兵した。日本では文祿の役・慶長の役とされている。1952年の出兵の際には日本軍は漢城（今のソウル）などを占領し、明国国境近くまで侵攻した。この時日本軍は漢城のあちこちに火をつけ、景福宮も焼失してしまった。

1585年7月に豊臣秀吉は関白となった。1587年5月、秀吉は九州を制圧する。この時秀吉は北政所に、「朝鮮国王に日本へ参洛するように申し付ける。もし参洛しなければ来年成敗する。さらに明国も手に入れる。」と抱負を告げている。つまり、秀吉の東アジア征服構想は具体的になってきたのである。この背景には東アジア世界の変動があった¹⁾。秀吉は対馬の宗氏に対馬一国の領地を認める代わりに、朝鮮王国を服属させるよう指示した。

1587年6月、宗氏は秀吉に猶予を求める。この背景には対馬が朝鮮との交

易によって生計を立てているという事情があった。朝鮮との交易関係を崩すことは対馬にとって死活問題となるからであった。1587年9月、宗氏は家臣の橘康広を日本国王使と仮称して朝鮮へ送った。橘康広は戦乱の続いた日本を豊臣秀吉が統一したので、祝福する通信使を派遣して欲しいと伝えた。しかし、朝鮮側は応じなかった。1589年6月、宗氏は秀吉に促されて博多聖福寺の僧景轍玄蘇を正使とし、自身を副使として朝鮮に渡った。この時朝鮮側は、海賊問題の処置を日本側に求めた。そこで、日本側は倭寇を手引きした沙火同を連行した。

この結果、1589年11月朝鮮国は通信使に黄允吉、副使に金誠一、書状官に許箴を任命した。翌年1590年3月に通信使一行は漢城を出発する。同年11月7日、秀吉は聚楽第で朝鮮通信使を拝見する。この時秀吉はこの使節を服属使節と思ひ込み、無礼な態度を取った。通信使一行は朝鮮国王に宛てた秀吉からの返事を受け取ると急いで帰国した。その返事の内容は朝鮮国王の服属を褒め、明国征服の先導を命じるものであった。

1591年3月帰国した黄允吉、金誠一は国王に復命する。この時黄允吉は「秀吉は出兵する」、金誠一は「秀吉は出兵しない」とまったく正反対の報告をした。当時実権を握っていた左議政の柳成龍は金誠一の報告を正しいとした。このため朝鮮側は防備態勢が遅れることになった。

一方、朝鮮通信使を服属使節と見せかけた宗氏は、秀吉の明国征服命令に再び困惑していた。宗氏の意向をくんだ景轍玄蘇は通信使の帰国に同行し、明国征服の先導をつとめるということは朝鮮の道を借りて明国へ入りたいということであると弁明した。しかし、朝鮮側はこの要求を拒絶した²⁾。そのため、1592年3月秀吉は約16万の兵を編成し、朝鮮へ出兵することを命令した。

同年4月小西行長・宗義智の第一軍は釜山を囲み、これを陥落した。次に東萊府城を囲み、陥落した。第一軍に続いて後続の日本軍も釜山に上陸した。日本軍は破竹の勢いで漢城に向かって進撃した。釜山镇や東萊府城の陥落を知った朝鮮国王は4月末に漢城を脱出し平壤に向かった。1592年5月3日夜

明け頃、小西行長の第一軍は東大門から加藤清正の第二軍は南大門からそれぞれ漢城に入城し、漢城は陥落した³⁾。

2 乙未事変

壬申倭乱で焼失してから長い間景福宮は再建される事はなかった。乙未（ウルミ）事変は、19世紀半ばに、再建された景福宮内で1895年に起こった事件である。当時の朝鮮国王妃であった明成皇后を日本人集団が殺害した事件である。日本では閔妃暗殺事件と言われている。

1873年頃、高宗と王妃である明成皇后は大院君にかわって政治上の実権をもつようになった。1895年、朝鮮半島の主導権をめぐる日清戦争に日本が勝利し、同年4月17日に日清講和条約が調印された。その内容は朝鮮国の独立、遼東半島・台湾・澎湖諸島の割譲、多額の賠償金の支払い、他国より有利な通商条約の締結であった。この内容に対してロシア・フランス・ドイツが遼東半島を清に返還するよう要求した。いわゆる三国干渉である。朝鮮での日本の勢力が強まると、明成皇后は日本への反抗的態度をさらに強めた。そして明成皇后はロシアの力によって日本を牽制しようと、ロシアと親密になっていく。

この事態に対して、当時の朝鮮駐在公使であった井上馨は今までの強硬な態度を変え、300万円の無償提供を申し出た。これは親露から親日への転換を狙ったものであった。しかし、国会が開会されなかったため実現しなかった。9月1日、三浦梧樓は朝鮮駐在公使としてソウルに到着した。彼の就任は前駐在公使の井上馨の推薦や同じ長州閥の後押しによって決定された。実は三浦は公使就任を外交は素人という理由から3度も断っていた。そのため明成皇后を油断させるためのカモフラージュか、公使就任後に引きこもった⁴⁾。

この時、明成皇后は三浦を軽視して親日派を排斥し、親露派（明成皇后親族）を再登用するという人事異動をスタートさせた。そのほかに彼女は役人・軍人の制服を朝鮮服に戻すことも行った。このような動きを封じ込めようと

景福宮の復元作業

10月7日の深夜から8日早朝にかけて明成皇后暗殺は行われた。三浦梧樓を中心とした実行部隊の将兵らは景福宮内に侵入した。そして、乾正殿にいた明成皇后を殺害し、遺体に石油をかけ焼却し、その遺灰を池に捨てた。

日本政府は日本人容疑者50数名を逮捕し、そのうち48名を広島刑務所へ送った。当時広島地審判事であった吉岡美秀の判決文には、三浦が明成皇后殺害を示唆したと3回も書かれていた。しかし、翌年の1月に全員が証拠不十分で釈放された。同事件にかかわった朝鮮人容疑者3名は処刑された。当時の世界情勢は帝国主義一色であったが、日本の行為に対しては国際的な非難が集中した⁵⁾。一方この事件以来、身の危険を感じた高宗は密かに景福宮を脱出しロシア公使館に身を寄せた。

乾正殿は景福宮のいちばん奥にあり、そこには「明成皇后受難之地」と書かれた石碑と2枚の大きな絵が掲げられている。1枚には血を流す明成皇后に対して刀を振り上げる日本人男性が描かれている。もう1枚には景福宮の庭園で明成皇后の遺体を燃やしている様子が描かれている⁶⁾。日本人観光客は普通あまりここまで来ない。ガイドが日本人観光客には案内しないようだ。筆者が訪れた時にはこの場所が復元作業中で実際に見ることはできなかった。恥ずかしながら筆者もこの事件について、ここを訪れるまで知らなかった。この事件をきっかけに抗日運動が朝鮮半島各地で始まったのだが、そんな歴史を知らない日本人は多いかも知れない。



図1 「明成皇后遭難之地」の石碑

出所：神谷 [3] 119頁

3 韓国併合・朝鮮総督府庁舎建設

ロシア公使館に身を寄せていた高宗は1897年に公使館を出ると慶雲宮を正宮とするとともに、国号を大韓帝国と定め国内外に朝鮮の独立を宣言した。しかし実際は何も変わらず、日本・ロシアの勢力を朝鮮から排除することはできなかった⁷⁾。日本とロシアの朝鮮半島に対する利権をめぐり争いが激しくなり、1904年に日露戦争に突入した。結果は日本の勝利に終わり、ますます日本の朝鮮半島に対する影響力は強力なものとなった。

1905年に第二次日韓協約が調印された。これにより韓国の外交権は完全に日本の手に渡った。この条約は独立国の証である外交権を奪われるものであったため、多くの官僚・軍人に自決により非を正そうとする者が相次ぎ、民衆たちも景福宮の大澳門前に集まり条約破棄を叫んだ。それらに耳を貸さなかった日本は次に、韓国を管理するためソウルの南山に統監府を設置し、初代統監に伊藤博文を命じた。事実上植民地政策にむけて第一歩を踏み出したわけである。日本は教育・司法権・警察権など次々に統監府に集めていった。そしてついに、1910年8月22日に日韓併合条約が調印された。この条約により大韓帝国は地上から消え、統監府にかわり朝鮮総督府が設置された。初代総督は寺内正毅である⁸⁾。

その結果、1910年から主要な楼閣を残して他の大部分の建物を撤去・払下げする「整理」がおこなわれた。そして1912年に総督府庁舎の景福宮内への移転が決定し⁹⁾、1916年7月起工式が行われ総督府庁舎の建設が始まった。これには元来の政治空間を占領し、奪い取る目的があり、このようなことは日本の植民地の多くの都市で行われた。工事は1926年に終了し竣工された。

ソウル市内を見下ろす南山から総督府庁舎は景福宮内に移った。わずかな建物を残し景福宮内の多くの建物が破壊され、韓国伝統の風水説をもとに建設されていた景福宮をまったく無視するように新庁舎が景福宮の正面に建設された。景福宮の建物とは異なり真南を向いている。総督府庁舎の正面から続く大通りは南大門を通り、南山に建設された朝鮮神宮の表参道に続いていた。そのため、朝鮮神宮を意識して真南に向いて建設されたのではないかと

も言われている。撤去された建物の一部は日本へ移築されたものもあった。新庁舎は大きなドームを持つ4階建てであった。人々を威圧するような巨大な建物は、当時は日本の国会議事堂とならぶ東洋随一の建物と言われるほど立派なものであったという¹⁰⁾。

総督府庁舎建設に当たり、景福宮の正門である光化門の撤去が1922年に計画された。そのことに反対した日本人がいた。民芸運動創始者の柳宗悦（やなぎむねよし）である。柳は「失われんとする一朝鮮建築のために」（『改造』大正11年9月号）という文章を發表し、破壊反対を世論に訴えた。その結果、光化門は景福宮の東側に移され、なんとか破壊を免れた¹¹⁾。

II 復元作業における伝統文化の復元

1 復元作業とその経緯

1993年8月9日、金泳三大統領は次のような特別指示を内閣に出した。それは、「長い苦悩の末、民族の誇りと精気を回復するために朝鮮総督府を速やかに解体することが望ましいとの結論に達した。（中略）来る統一時代を迎えるために、5千年の歴史をもつ民族にふさわしい国立中央博物館建設事業として早速検討し、着手すること」というものであった¹²⁾。1990年から景福宮の重要部分の復元工事は着手されてきたが、この大統領の指示により本格的に復元事業が開始されることになった。

「3・1独立運動」76周年の1995年3月1日、「告由祭」が旧庁舎前で行われ、8月15日の光復記念日から旧総督府庁舎の撤去作業を行うことが發表された。「3・1は主体的な民族精神の発露の日。植民地統治の象徴である旧総督府に歴史からの退場を告げるのにふさわしい」（文化体育省）との判断によりこの日に式典が行われたようである¹³⁾。この旧総督府庁舎は解放後しばらく中央庁舎として使用され、1986年から国立中央博物館として使用されていた¹⁴⁾。

旧庁舎撤去に関して韓国国内では賛否に分かれたが、結局は1995年8月15

日から撤去作業が始まり1996年に完了した。その後弘礼門と禁川に架かる泳濟橋の復元作業が始まり、2001年10月26日に落成式を迎えた。2003年には勤成殿の補修作業が終了して、竣工式を迎えた。この補修作業は、1998年の緊急安全診断の結果により建物を支える4本の隅高柱の一部が破損していることがわかったため行われた¹⁵⁾。

また、日本人の民芸運動創始者・柳宗悦の努力により破壊を免れた光化門は、1950年に起こった朝鮮戦争のため楼閣部分は焼失してしまい、築台を残すのみとなった。1968年に朴正熙大統領により以前の位置にコンクリートで再建されたが、厳密には移転される前の位置とは少しずれていた。元の場所に道路があったため本来の場所より約7メートル後ろに下げざるを得なかったからである¹⁶⁾。

2 伝統文化の復元

韓国政府にとって、景福宮の復元作業は以下のような韓国の伝統文化を復元し、それを国民に示していく作業であったと考えられる。

(1)丹青

景福宮の復元において丹青や紋様を見逃すことができない。丹青は黄、赤、青、緑、白、黒の様々な色彩で、紋様を組み合わせると同時に、木材を保護する効果を持っている¹⁷⁾。丹青は品格と部材の部分によってそれぞれ適切に使用される。丹青の歴史は古く、中国から伝来したが、その後は独自の展開をなしてきた点に筆者は注目した。その伝来は高句麗時代にまでさかのぼることができる。古人たちはカラフルな色に囲まれると幸せが訪れると信じており、王宮や寺刹など限られた場所にしか使うことができなかった。

また、丹青は中国の五行やそれにちなむ辟邪進慶の色であると言われており、それに囲まれていれば災いや不幸に見舞われない多幸な日々を送ることができる信じられていたのであった。その色を幼い子どものセクトン・チョ

ゴリや座布団カバー、布団などに使用している。つまり韓民族にとって丹青の色は寿福招来のシンボルカラーであり、その色に祈りを託してきたのである¹⁸⁾。例えば景福宮の中でも、交泰殿では毛老丹青という華麗な丹青を見ることができる。

そもそも丹青は王宮など限られた場所にしか使用できなかった。つまり庶民とはあまり縁のないものであった。しかし、韓国人にとってこのように特別な意味を持っており、景福宮に来れば民族を感じることができるのだ。景福宮は民族アイデンティティのシンボリック的存在であり、ナショナリズムに対して心理面での効果があると考えられる。

(2)四神

丹青の紋様は五行説にもとづく五彩を基本にしており、五行、色相、四神思想との関係を表で見ると次の通りとなる。

五行	木	火	土	金	水
節期	春	夏	土用	秋	冬
方位	東	南	中央	西	北
色相	青	赤	黄	白	黒
四神図	青竜	朱雀	人黄	白虎	玄武

出所：韓国文化院監修〔9〕をもとに作成

これらは景福宮の四大門に見ることができる。また、景福宮の政殿である勤政殿の天井には王を象徴する双竜の紋様が描かれている。光化門の天井には鳳凰、麒麟、玄武が描かれている。このうち鳳凰は聖なる君主のいるところにこつ然と現れるとされ、王を象徴している。麒麟は賢い王が生まれると真っ先に知らせて回ると考えられている。玄武は亀と蛇が合体した姿をしていて、その甲羅には「王」という文字が描かれている。これらの絵はいずれも王を象徴するものである。

その他に東門である建春門には竜、西門である迎秋門には虎が描かれている。勤政殿の東西南北の階段に四神像が置かれている¹⁹⁾。木造の建物には丹青や壁画などのほかに彫刻も見ることができる。勤政殿の月台には十二支神像、四神像、蓮花紋様を彫刻した欄干をめぐらしている²⁰⁾。

(3)日月山水図の屏風

王宮の正殿など王が座る背後には、日月山水図が描かれた屏風が必ず置かれている。屏風自体は王を象徴するものとされ、王が移動するところへは必ず持っていったという。日・月・山・水・赤松の5種類を描いた屏風である。日は王を、月は王妃を象徴する。その後ろにある5つの峰は中国に実在する山で、全世界を秩序付ける神が住んでいるとされている。朝鮮半島を代表する5つの山だという説もあるが、これはナショナリズムを考えるうえで興味深い。その他に描かれている松・滝・海・波などは王とその子孫の永遠の繁栄を祈ることのあらわしているとされている²¹⁾。

いずれにせよ王室の尊厳を象徴する日月山水図の屏風は、それ自体の保存においてではなく、復元される景福宮の中においてその民族文化的な意味が増していくのではないだろうか。

おわりに

70年代初め、当時の朴正熙大統領によりセマウル運動²²⁾が進められ、韓国の近代化が始まった。セマウル運動は瞬く間に農村の風景や生活を変えていった。生産力や活気、精神力の向上において評価は受けたが、失った伝統文化も多い。そして、セマウル運動はさらにスピードを速めて都市化を進め、全国へと広がっていった。その結果、韓国は驚くべきスピードで経済発展を遂げ、80年代には社会は安定し豊かになった。それに伴い韓国国内に日本をはじめ他の国の文化が流入するようになり、ますます伝統文化が失われつつあった。

そのような状況の中で始まった景福宮の復元作業は、韓国の伝統文化を探し守ることであり、ナショナリズムのシンボルとなるものを見つけ出す作業だったのではないだろうか。つまり、経済成長で失われていく伝統文化への回帰の中で民族アイデンティティを再確認していく作業であったと考えられるのである。

1993年韓国で1本の映画が年間観客動員数100万人を超える大ヒットを記録した。林権沢監督のパンソリ²³⁾映画『西便制』（邦題『風の丘を越えて』）である。この映画は韓国独特の考え方「ハン（恨）」を韓国伝統芸能のパンソリにのせて歌っている。韓国のハンは漢字では「恨」と書くが日本の恨みとは違う。ハンは返すという発想ではなく、プリ（解きほぐす）が期待される。この映画は韓国近代史に埋もれたさまざまなハンを解きほぐしたために空前の共感呼んだ²⁴⁾。この映画のヒットの裏には、この映画の中に現代韓国人が忘れかけていた伝統文化を通して民族のアイデンティティを感じることができる要素があったからではないだろうか。

日本にいと、メディアの影響により韓国における反日の印象ばかりが強調されているように感じられる。しかし、現代韓国ではこのように反日は弱くなり、伝統文化への回帰によりナショナリズムを確立しようとしているのではないだろうか。景福宮の復元作業を通してそう考えた。

注

- 1) 北島 [1] 2～4頁, 参照
- 2) 北島 [1] 2～4頁, 参照
- 3) 北島 [1] 15～16頁, 参照
- 4) 角田 [2] 276～285, 281～285頁, 参照
- 5) 角田 [2] 317～326, 339～342頁, 参照
- 6) 神谷 [3] 200頁, 参照
- 7) 武井 [4] 26頁, 参照
- 8) 藪 [5] 79～81頁, 参照
- 9) 青井 [7] 36頁, 参照

- 10) 武井 [4] 189頁, 参照
- 11) 武井 [4] 190頁, 参照
- 12) 藤崎 [10], 引用
- 13) 「「恨」一掃へ国民運動」『朝日新聞』(夕刊) 1995年3月1日付, 参照
- 14) 韓国国立中央博物館 HP [12], 参照
- 15) 朝鮮日報 HP [11], 参照
- 16) 武井 [4] 190頁, 参照
- 17) 韓国文化院 [9] 11頁, 引用
- 18) 金 [6] 221~223頁, 参照
- 19) 武井 [4] 226頁, 参照
- 20) 韓国文化院 [9] 12~15頁, 参照
- 21) 武井 [4] 229頁, 参照
- 22) 農閑期の農村生活を活性化し, 国民生産力を高める狙いで農村の近代化を行った運動。
- 23) パンソリとはパン(広場)とソリ(音・歌・唱)の合成語である。1人の唱い手が1人の鼓手が打つ長短(拍子)に合わせて, 長いストーリーを一人何役もこなしながら歌い, 語り, 演じる。
- 24) 野村 [8] 8~10頁, 参照

参考文献

- [1] 北島万次(著)『秀吉の朝鮮侵略』山川出版社, 2002年
- [2] 角田房子(著)『朝鮮王朝末期の国母・閔妃暗殺』新潮社, 1988年
- [3] 神谷丹路(著)『韓国近い昔の旅ー植民地時代をたどる』凱風社, 2001年
- [4] 武井一(著)『ソウルの王宮めぐりー朝鮮王朝の500年を歩く』桐書房, 2000年
- [5] 戴景三(著)『朝鮮総督府の歴史』明石書店, 1994年
- [6] 金両基(監修)『世界の歴史と文化・韓国』新潮社, 1993年
- [7] 青井哲人(著)『植民地神社と帝国日本』吉川弘文館, 2005年
- [8] 野村伸一(著)『巫と芸能者のアジア』中央公論社, 1995年
- [9] 韓国文化院(監修)『月刊韓国』(自由社) 1997年12号
- [10] 藤崎郁子(著)「保存か撤去か揺れる韓国世論」松下政経塾 HP
<http://www.mskj.or.jp/index.html> 2005年10月20日
- [11] 朝鮮日報 HP <http://japanese.chosun.com/> 2005年11月8日
- [12] 韓国国立中央博物館 HP <http://www.museum.go.kr/jap/index.jsp>
2005年11月10日